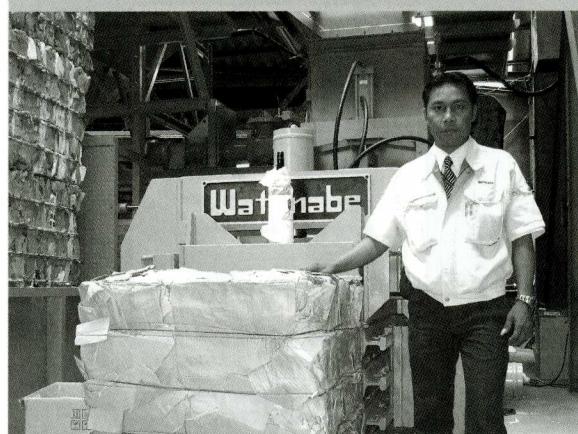
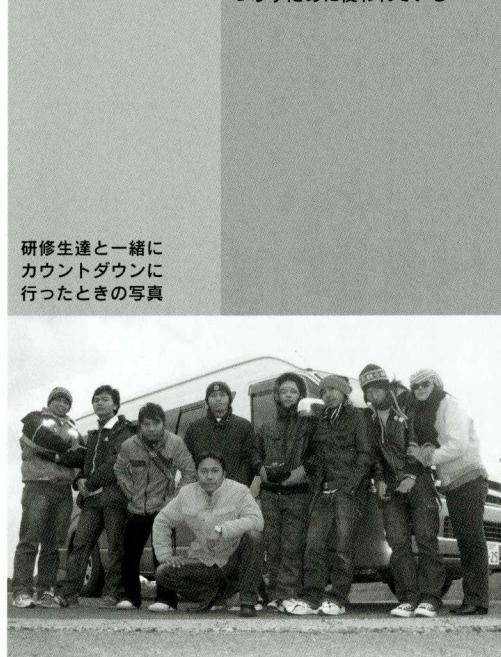
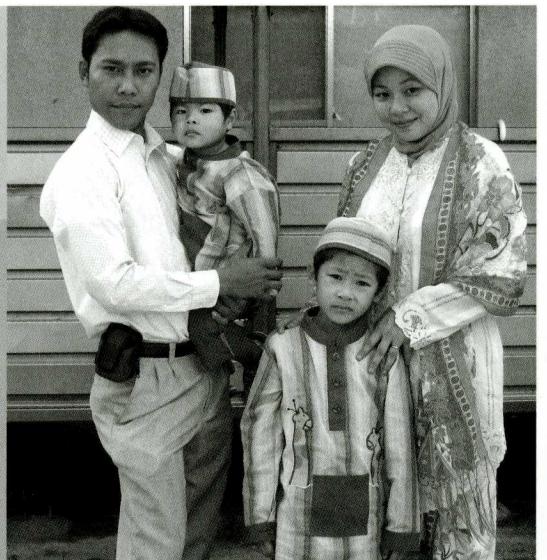


家族4人そろって、断食明け祭りを祝ったときの写真。  
アグンさん以外、家族全員インドネシア風のムスリム衣装を着ている。  
奥さんは普段もこのように頭にスカーフを被っている



会社で設計した機械の前で。  
この機械は資源廃棄物(紙や缶)などを  
つぶすために使われている



研修生達と一緒に  
カウントダウンに  
行ったときの写真



アグンさんはインドネシア人労働者の代表になり、  
パネル・ディスカッションでスピーチをした

営業スタッフの仕事は、会社が設計した機械をただ売りに行くという単純な仕事ではない。アグンさんの「外国人」顔と、名刺のカタカナ書きの名前に戸惑った。今は、多くの顧客から「あなたの熱心さは日本人も見習わないとね」と実力を認められるようになつた。そして、日本人がそのような眼で外国人を認められるようになりつつあることが嬉しい。

二〇〇八年の大晦日。同郷の研修生の支援と教育にもかかわってきたアグンさんは、年越しの晩を家族と一緒に過ごさず、研修生たちとカウントダウンをした。家族も大変ですが、同郷者の成功と満足も自分の幸せです」と語る。アグンさんの夢は、日本でえた知識を生かし、インドネシアの「ゴミ処理問題に貢献することだという。

初めての飛び込み営業のとき、先方の従業員はアグンさんの「外国人」顔と、名刺のカタカナ書きの名前に戸惑つた。今は、多くの顧客から「あなたの熱心さは日本人も見習わないとね」と実力を認められるようになつた。そして、日本人がそのような眼で外国人を認められるようになりつつあることが嬉しい。

二〇〇八年の大晦日。同郷の研修生の支援と教育にもかかわってきたアグンさんは、年越しの晩を家族と一緒に過ごさず、研修生たちとカウントダウンをした。家族も大変ですが、同郷者の成功と満足も自分の幸せです」と語る。アグンさんの夢は、日本でえた知識を生かし、インドネシアの「ゴミ処理問題に貢献することだという。

## 外国人として生きる

# 同郷者との絆を大切に今日も走る、 インドネシア人の営業マン

## スリ・ブディ・レスタリ

東京外国语大学大学院地域文化研究科博士後期課程

二〇〇八年も残すところ一週間。アグンさんにとって多忙な日が続く。福岡県のある鉄工会社に入社して七年目、同社初の外国人営業スタッフに任命されて二年半が経つた。妻の雪絵さんが里帰りの支度をするなか、アグンさんは出社し、出張先に向かう。営業マンとして、取引先への年末のあいさつは欠かせないものである。

アグン・ウイボウオさんは一九九七年六月に初めて来日した。インドネシア労働省と日本のIMM(中小企業国際人材育成事業団)の世話で三年研修の機会を得た。研修が終わって、日本語教室で知り合った雪絵さんと故郷スマトラ島で結婚し、しばらくはインドネシアに住んでいたが、現在は一家四人(子ども一人)で福岡県に暮らしている。日本人にとっても苦労の多い営業に従事する数少ないインドネシア人の一人である。

初来日のころだった。受け入れ先の木材加工会社が倒産したため、アグンさんは佐賀県の家具製造会社に移った。そこには既に七人のインドネシア人がいた。アグンさんは、厳しい職場と社長の荒い態度に驚いた。アグンさんたちが工場でミスをすると、「馬鹿野郎!」「使い物にならないから帰れ!」などと乱暴なことは投げつけることも度々あった。萎縮したインドネシア人はさらにミスを犯し、作業効率もあがらなかつた。

そこで仲間をまとめて、事態を改善する大役を果たしたのが最年少のアグンさんだつた。社長の態度は常軌を逸してはいたが、イジメではなく、彼なりの教育であるのではないかとも思え、仲間にも前向きに考えるよう説得した。一方で、仲間を代表して社長にこう申し出た。「自分たちも態度や働き方をできるだけ改善するので社長も態度を和らげて欲しい」と。さらに、「三ヶ月経つても僕たちに変化がなかつたら帰らせてもよい」と言った。社長の返事はこうだつた。「もしうまく行かなかつたら、お前の先輩じゃなくお前だけがクビだぞ」。大きな賭けだつたが、アグンさんは仲間のために受け入れた。

変化が起きた。仲間たちが明るい表情で自信をもつて働くようになった。ミスを犯しても、社長を恐れずに正直に報告するようになつた。そして社長の態度も大きく変わつた。双方の信頼と意志の疎通が十分ではなかつたのだ。アグンさんは社長から絶大な信頼を受け、「ずっとここで働いたらどうだ」と勧められたが、帰国を選んだ。

現職場の営業は、日本人でも昔をあげて辞めてしまうほどに厳しい。製造部から営業部に移つたのは、もちろん成績が良かつたからだが、当時周りの日本人の厳しい視線を浴びた。「外国人に営業は無理ではないか」という不安の声が多かつたのだ。会社もじつはアグンさんに営業の仕事を任せるのは大きな賭けだつたという。

だが、アグンさんは強い意志があつた。最大の理由は、周りのインドネシア人労働者の励みになりたい、という思いであつた。自分がこの分野でやり遂げることができれば、きっと他のインドネシア人ももつと自信をもち、がんばれるようになる、そしてインドネシア人にに対する偏見も無くなる、という信念があつた。

この社長とのつきあいはそれで終わりではなかつた。しばらくインドネシアで新婚生活を送つた後、再来日した折も、最初に助けてくれたのはこの社長だつた。現在の職場に就職が決まる前、アグンさんは仕事を与えてくれるなど、全面的に支援してくれたのだ。研修生のひどい待遇の話はよく知られているが、自分は幸運だつたと思っている。

## インドネシア人への 励みとして

この社長とのつきあいはそれで終わりではなかつた。しばらくインドネシアで新婚生活を送つた後、再来日した折も、最初に助けてくれたのはこの社長だつた。現在の職場に就職が決まる前、アグンさんは仕事を与えてくれるなど、全面的に支援してくれたのだ。研修生のひどい待遇の話はよく知られているが、自分は幸運だつたと思っている。